

---

# ゲンゾウにナレマシタ

たくろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゲンゾウにナレマシタ

### 【Nコード】

N0799A

### 【作者名】

たくろう

### 【あらすじ】

天使な小生意気の続編の設定。 恵は小悪魔に願い事を…だが、小悪魔はその願いをとんでもない形でかなえた。 な、なんと源造と恵が入れ替わってしまったのです。

## 1 恵の願い（前書き）

先に『天使な小生意気』（1～20巻）までを全て読むことをお勧めします。

## 1・恵の願い

「ははっ、小悪魔に格好よく『望みが叶った』なんて言っちゃったけど……。」

テラスの手すりにもたれかかりながら、恵は溜息混じりに呟いた。

溜め息をつくその様子が妙に色っぽく可愛かった。

「……叶うわけねえだろっ!!」

拳を握り締め恵が叫んだ。

「大体、俺は最初から女だったって?! はは、冗談だろ……。」

女だった頃の記憶なんてたった9歳までのほんの僅かな物で、もとも男勝りだった恵の女の子らしい記憶なんて残ってはいない。さらに酷い事に、小悪魔が作り出した想像の記憶、つまり男の子の記憶が今も尚、恵の幼き頃の記憶として残ってしまっている。

そりゃ自分がもとも女だったって事は心の奥底で理解しているつもりだ。

美木と初めて会った時の事も、源造に助けられた事も…覚えている。記憶として…。

”それが事実だ。” そう受け止めようと恵は記憶が戻ってから、2日間努力した。

だけど、駄目だった。

どうしても自分が女だっと思って思えない。6年もの長い間、ずっと自分は男の子だったと思ってきたのだ。さらに、6年前の恵もまた、男になりたかったのだ。

自分が女だと理解し、女になるのはもはや不可能な事なのかもしれない。

「はあ……。」

恵の記憶が戻ってから、何度目の溜息だろうか？。

皆の前では、平静を装って、

”女になりきることを努力している”

ように見せてはいるが、恵の本心は違った。恵が考えているのは一つだけ……。

「（どうやったら男になれるのかな……）」

そう考えてしまってから、……美木や源造が聞いたら何ていうかな……なんて考えてみる。

”めぐちゃんのバカあ！バカ、ドバカア！”と美木にはバカを連発されるかもしれない。

怖いのは蘇我源造である。源造は恵の為なら、女装までしてしまう男なのである。

「俺が男になるなんて言ったら、あいつは何するかわからんかな……ああ、考えると寒気がしてきた」

と、恵が女の子らしいという言葉からは程遠い口調で呟く。

「（『男になる』か……。前は『男に戻る』だったのにな……。よく考えたら、俺、前より無謀なこと考えてるんじゃないか……。）」

確かにそうだ。前は魔本で女にされたと思い込んでいた。

だから、そんな凄い魔力をもった本なら男に戻る事も可能だと思っていた。

だが事実は違った。魔本で女にされたのではなく、自分が男であると思い込まされただけだった。即ち、あの本が恵にした事は結局、ただの記憶操作なのである。

ではあの本に出来なかった性別を変える、恵を男にするという事が出来る物はこの世に存在するのだろうか？

「はあ……。このままずっと女のままなんかな……。俺には源造みたいなパワーは一生、手に入らないのかな……。」

絶望だった。

「（もう一度、小悪魔に会いたいな。）」  
ふと恵は思った。

だが、それは無理だろう。魔本は源造が管理している。  
源造がいつも、魔本が行方不明にならないか確認しているとまで  
言っている。

アイツはこういうことに関してはまめな奴だ。恐らく嘘ではない  
だろう。

”女の子になります”と言ってしまった恵が源造からその本を借り  
るなど出来るわけが無い。かといって無断で忍び込むのもどうか  
と思う。ばれた時が何しろ、怖い。

「ああ、もうどうすりゃいいんだよ」

その時だった。突然、恵の頭の中で、

『フツ、満足してない様だな』

と声が聞こえた。

不気味な、そして独特なこの声、忘れるものが。

アイツだ。

あの小悪魔だ。

小悪魔は笑っているかのようだった。

「お、お前はっ！？」

恵が叫んだ。振り返ってみるが、小悪魔がいない。

いや、そもそもどっちの方角から声が聞こえたのかもわからない。  
いたる所から、小悪魔の声が聞こえ、反響していた。

『叫ばなくても聞こえる。私はお前の心に直接、話しかけているん  
だからな』

どうやら恵の幻覚ではなく、本当に小悪魔らしい。

恵は二三回呼吸をしてから、

「でっ、小悪魔が何の用だ」

『用？…用があるのは恵の方じゃないのか？男になりたいって願っ  
たら…』

「フン、俺はお前のせいで大分、迷惑したんだヨ。」

『迷惑？』

「勝手に人の頭の中に入ってくんな、こんな力があるんなら俺を男にしろ！」

恵は叫んでしまっていた。小悪魔がクツクツと不気味に笑う。『おかしなことを言う。お前はあの時確かに『望みが叶った』と言った。』

迷惑だと言われるのならこっちが迷惑だ。』

「取り消す、あん時の言葉は取り消すから男にしろ。」  
そこまで言っただけは一回、深呼吸する。

「もつともお前にそんな力、ねえだろうけど……」  
嫌みつたらしく恵が言った。心の中で、「勝った」と恵は思った。こつ言われたら小悪魔は何も言い返せないだろう。  
何しろ、事実、小悪魔に”そんな力”は無いのだから……。

次の瞬間のことである。

ドンガラガツシャーンと何かがテーブルから落ちた。

恵はテーブルの方に目を向ける。

「っ！？」

恵は驚かざるをえなかった。

何しろ、あの魔本が目の前のテーブルの上に置かれているのである。

確かにさっきまでテーブルの上にこんなものは置いてなかった。

そして、魔本が自分の目の前で勝手にぱらぱらとめくれ、例の小悪魔のページが開いた。

本からあいつが、小悪魔が現れた。

本の上にいつもと同じように、恵を見つめて立っていた。

「……」

恵は啞然としていた。

「お、お前、どうやってここに！？」

こいつは源造が保管していた筈だ。

「私に力がない。とても思ったのか？」

小悪魔は余裕たつぷりだった。

こんな移動ぐらい造作もない。といっているかのような顔をしていた。

とはいえ、こいつは前にも一度、川から自力で這い上がったのだ。別にここに現れてもおかしな事ではないのかもしれない。

「ふっ、源造といい、お前といい、全く数百年存在してきたがお前らのような奴らは初めてだ。いいだろう。そこまで願うのならば本当にお前を男にしてやろう。……いいお似合いコンビだろう」

小悪魔がフツと笑った。

「えっ!？」

恵が小悪魔に問い返す暇も無かった。

次の瞬間、不気味な小悪魔の呪文が響き渡った。

「 ×      〒 + & % \$ # @ ? !      @ 〒 % + # \* × \$      ÷ \$  
# @ ? !      @ 〒 % + # \* × \$      ÷ \$ # @ ? !      @ 〒  
% + # \* × \$      ÷」

そうだ。

これだ。

この不気味な呪文。間違いない本物の呪文だ。

「くっ」

恵は歯をかみ締める。

声をあげる暇なく、小悪魔に魔法をかけられていった。そう、このなんともいえない、気味の悪さ。目がくらむような不気味な閃光。間違いなく呪文をかけられている。

「待てっ」

と声を出す、小悪魔は呪文を止めようとはしなかった。

「\$ # @ ? !

@ 〒 % + # \* × \$      ÷ \$ # @ ? !

@〒% + # \* × \$ ÷ \$ + # ÷ \$ \* # \$ × # @ ? !  
% @〒% + # \* × @ \$ 〒 ÷ @ ! ?」

小悪魔が黙った。呪文が終わったのだ。

あたりは再び、静けさを取り戻していた。

恵はすかさず自分の身体を確認する。

あれっ？恵は違和感を感じた。

何も変わっていない。

女のままで。

髪の毛も長い。胸だってある。何も変わっていないかった。

「…やい、小悪魔！どこが男だっ！この大嘘つき！」

「フッ、前から言ってるだろ私はめったに嘘は言わんと」

「どこがだっ！どう見たって女のままだじゃんか。約束だぞお。男にしろヨ！」

「心配ない。」

小悪魔はそう言うのと、本の中に消え始める。

「ま、待てっ！」

恵が叫び、本の中へ入っていく小悪魔を捕まえようと駆け寄る。

「フッ、その時がくればわかる。」

小悪魔を掴もうにも奴には実体が無い。恵の手は小悪魔の身体を透けてしまった。

そうこうしている間にもう小悪魔は腰まで本の中に隠れてしまっている。

「長く待たなくていい。今日だ。今日中にお前は男になる。もっとも源造の犠牲のもとにだがな。恵ちゃんのせいだよ。恵ちゃんが男の子になりたいなんていうから、源造が犠牲になるんだ」

と、嫌みつたらしく小悪魔が言った。

「なにい?!」

恵が声をあげた。

「なあに奴の命をとるわけじゃないから心配しなくていい。」

そう言つて小悪魔は消えてしまった。

「こら待てっ！わかるように説明しろっ！」

恵は魔本を手に持ち、小悪魔が出てくるよう、魔本を右手で叩く。  
『もつとも男の中の男になれるかは知らんがな…』

小悪魔の馬鹿にしたような言葉を最後に、恵の手の中にあつた魔本も消えてしまった。魔本が消えてから、恵は力が抜けたように椅子に座り込んだ。

「男になる…？」

そんな事があつたらどれだけいいだろうか？パーティーを開かなければならない。皆に仏蘭西料理のフルコースをおごつてもいい。皆に、財産の半分をわけあたえてもいい。源造と結婚しても…（…男になるのだからそれは流石に不味い）。だが、今、自分は男になつていない。男になる気配すらない。大体、前が前である。6年もの間、嘘の記憶を与えつけた奴である。あてになどなるものか…。「（でも、口からでまかせなのか？アイツそんな事言うヤツだったか？信じれんが信じたい。だけど、俺のせいで源造が犠牲つて…）」

恵は混乱していた。あの呪文は偽物とは思えない。

だが、小悪魔にそんな力があるともやはり思えない。

性別を変えらというのは恐らく相当な魔力が必要だろう。

恵が考えにふけていると、

T L L L L L L T L L L L L

と、床に落ちていたコードレスの電話が鳴り響いた。

先ほど小悪魔の魔本が現れた時、床に落ちたのだらう。

「（壊れていなくてなによりだ）」と、恵は考えつつ、受話器を取る。壊れていたら何故壊れたか、説明せねばならないからである。

『恵様』

頼子さんだった。

『皆様が来ていますが…』

言われてからハッとした。

そうだ。今日は源造や美木達と映画に行く約束をしていたのだ。  
恵は慌てて、玄関へ向かった。

玄関の外には源造、藤木、安田、美木、小林の五人が待たされていた。

恵はまだ出てこない。大急ぎでこちらに向かっているのだろう。

「おい、そう言えば呪いは大丈夫なのか？」

小林が心配そうに源造に聞いた。

「だからいつてるじゃんか、呪いなんてかかっちゃいねえってよお」

「…無理せんでいい…」

「だが、運は良くなってるぜ」

呪いはすっかり消えた。という意味だった。

源造は言葉を続ける。

「今朝まではちゃんとあそこにいたけどよお、

小悪魔の奴、今頃、押入れで成仏しちまつてるんじゃないか？」

成仏どころか、天使邸にまで来てしまったのだが、源造は知るよしもない。

「油断はするなよ」

小林が釘を刺す

「・・・あたりめえじゃねえか・・・」

源造が言った。

「ごめえん、待ったあゝ！」

恵が走ってきた。

「めぐうゝ！！大丈夫、全然全然待つてないよ！」

源造が元気一杯に答える。恵に抱きつこうとしているではないか。

あまりの迫力に恵がひき、

「馴れ馴れしく言っな！」と、叫ぶ。

「めぐちゃん、女の子はそんな乱暴な言葉使わないわよ。せめて『馴れ馴れしく言わないでヨ』でしょ？」

美木が訂正する。そうだった。

恵は『女の子になります宣言』をしてしまったのだ。（<どんな宣言だよ！？）

恵は反論したくなるが、皆の前では、特に美木の前では仕方がない。

「あっ！馴れ馴れしく言わないで」と言い直す。

その言葉が妙に可愛かった。源造が顔を赤くさせ、

「めぐちゃんって優しいね。最近、ますます女らしくなったよ」

と、優しい口調で言う。

「（くそお、こんな事やってちゃ馬鹿がつけあがるだけじゃねえか！美木の奴、人の気もしらないでっ！）」

これが恵の内心である。

まさしく口だけ、女になる努力など微塵もない。そんな恵を見透かしてるのか、美木がハアと誰にも聞こえない程、小さな溜め息をついた。

「さて、皆そろった事だし。行きましょうか」

美木が提案した。

「そうですね」と、藤木が安田が小林が賛成する。

と、いうわけで、一同は映画館へと徒歩で向かった。

映画館はそれ程、遠い距離ではない。いやむしろ近いぐらいだ。それ程広い映画館ではないが、100〜400人程度を収容できる劇場が7館ほどある。

7階建ての小さなビルの4階から7階が映画館だ。4階にロビーや売店があり、劇場は4階に1館、5階、6階、7階にそれぞれ2館ずつある。

「暗闇だからって変なことしないでね」

4階のロービーで待っている時に、美木が念を押す。

恐らくその言葉は小林に向けられているのだろう。

だが、小林は自分に対しての言葉だと思っていないのか、  
「そんな奴は俺がやつつけてやりますよ」

と、格好よく言うのと、チケットを買いに行ってしまった。

「そうだぞ、変な事したら殺すからな」

恵も源造に対し、言った。

「めぐちゃん！」

美木が恵に注意した。

”女の子らしくない”といってるのだろう。顔は笑っているのだが、目が笑っていない。

「（こ、怖い。怖いぞ…美木）」

美木の笑顔であり、笑っていないその目に恐怖を感じつつ、恵はしづしづ

「源造君、変な事しないでね」と言いなおす。

源造君と名前で呼んだのが不味かったのだろう。源造は大喜びだった。

「大丈夫、そんなこと全然しない！」

源造は喜びを全身で表現していた。

その不気味さに恵がそして皆が一步、いや数歩、そそくさと彼から離れる。

「げ、源造君、それは止めてくれない（き、気色悪い）」

美木がいるので、乱暴な言葉は使えない。

「はいはい、止めます！止めます！」

と、源造は言った。とは言うものの、何も改善されていない。そればかりか、

「僕達、恋人みたいだね」

と、言う始末である。これには、藤木が源造を睨みつけた。

もっともその程度の嫉妬を気にする蘇我源造ではない。

ちなみに安田は可愛い恵がカメラに収まると、嫉妬どころか喜び

である。

「な、何いつてんだよ・・・言ってるのよ」

美木に睨みつけられ、恵は途中で慌てて言い直す。

「めぐう〜！！可愛いよぉ！」

源造が恵に抱きつかん勢いである。

恵も反撃できず、ただ逃げるだけ…。

こういった日常に恵はこりこりだった。

「（以前だったら、源造叩いても何にも言わなかったくせに・・・）」

「

恵は美木を睨もうとしたが、逆に睨み返され、沈黙。

「その調子、その調子。二人ともお似合いよ」と美木は満足げである。

どうやら恵を女の子らしくしたいと共にあるうことが蘇我源造とくつつけようと考えているようだ。

恵もそれに気づき、今度はしつかりと睨み返す。

少しは悪気を感じているのか、今度は美木も睨まず、完全な笑顔を見せてくれた。

恵はとりあえず、一息つく。

「皆さん、お待たせしました」

列に並んで映画の前売りチケットを座席指定券に引き換えていた小林が戻ってきた。

チケットは、先日の岳山での事件で助けてくれたお礼にと、美木のおごりである。

小林だけは武士たるもの、”自分で払わなければ”とか何とかいい、自分のお金で買ったらしいが…。

「座席は一列に確保しました。F列の15番から20番まであります」

小林がチケット片手に説明する。

「俺、めぐの隣がいい！」

源造が真っ先に手を上げた。

「俺、じゃなかった、私は嫌！」

恵が異議を申し立てる。

「私はどこでもいいけど…」

美木が言った。

「別にどこでも…」

残念そうに安田が言った。安田はどこでもいいらしい。

劇場内ではカメラが撮れないから、別に恵の隣でなくてもいいというわけだ。

「…俺は恵さんの近くが…」

藤木が勇気をだして言った。

もつとも勇氣は出したが、誰も聞いていなかったようであるが…。

「ねえねえ、どうする？じゃんけんで決める？」

と、美木の声が藤木の言葉をかき消していた。

「そうですね。ここは公平に勝った人から順に右側ってことで…」

「私はそれでいいぞ」

と、恵も賛成する。

「上等だ。俺もいいぜ。」

源造も納得したようだ。

「じゃあ、俺も…」

安田も同意する。

「…俺もいいぞ」

藤木も結局、同意した。

「せえゝのっ！じゃんけん ポン！」

恵のかけ声で皆がいつせいに手を出した。

恵はパー、小林はグー、美木はグー、源造はパー、安田はパー、

藤木はチヨキと勝負は決まらなかった。

次は恵がグー、小林がチヨキ、美木がパー、源造はグー、安田はチヨキ、藤木はパーと勝負は決まらない。

三度目も、恵はチヨキ、小林はグー、美木はチヨキ、源造はチヨ

キ、安田はパー、藤木はチヨキとまたしても勝負がつかない。

「なあ、人数多すぎねえか」

「源造、まともなことというじゃやねえか」

と、恵が言った。源造の言う事はもつともだ。

このままでは勝敗は決まらないだろう。

「じゃあ、とりあえず、皆グーとパーを出して、二グループにわけましよ。それで勝った人同士が、戦うの……」

美木が提案する。皆がいつせいに出した。

今度はうまく言ったようだ。恵・小林・藤木がパー。安田・源造・美木がグーだった。

次に、恵・小林・藤木グループでは、恵がチヨキで他の二人に、小林がパーで藤木に勝った。

安田・源造・美木グループでは、美木がパーで一番初めに、次に源造がチヨキで勝った。

最終的に決まったのはこうだった。

左から藤木・安田・小林・源造・美木・恵だった。

この結果に、源造が、小林が、藤木が泣いたのだが、ほっておこう。

「めぐちゃん。ポップコーンいる？」

席についてすぐに美木が恵に聞いた。

流石、花華院家の美木が用意した席だけあって、広い。

飛行機や新幹線のようにものを置けるテーブルもあった。

値段も普通より1000円ほど高いらしい。前が通路で足が伸ばせた。

「うん？ いや、止めとく（太るから）」

その考えは妙に女の子らしい。

「じゃあ、飲み物は？ 買ってくるけど……」

「そおだな。コーラお願い」

と言つて、お金を美木に渡す。

「恵はコーラ、と。源造君は？」

「俺？俺もコーラかな」

と、源造も中身の少ない財布からお金を出す。

そして、そのお金を美木に手渡した。

美木はお金を受け取ると、立ち上がり、小林の前に行く。

「小林君は？」

「えっ、俺は…アイスコーヒーで…。あつ、皆の分、大変ですね。お供します」

小林が立ち上がった。確かにこれだけの量を一人で持つのは不可能に近い。

いや、正直、二人でも大変だが…。

「安田君と藤木くんは？」

「俺、オレンジお願いします」と、安田。

「俺はアイスコーヒーで…あつ、俺も行きます」

藤木と美木と小林が売店に向かうのを恵と源造と安田が見送った。安田は館内撮影禁止でがっかりしているようだった。安田はトイレに行くといつて席を離れた。まだ、あたりは明るい。上映開始まで10分近くあるのだ。

近くに誰もいないことを確認してから、

「なあ、源造？」

恵が真剣な顔で言った。

「なあに、めぐ…。」

最初はハイテンションで応対する源造だったが、恵のただならぬ雰囲気黙り込む。

「あれからお前の呪いどうなったんだ？」

「えっ、い、いやだなあ、俺、呪いなんて全然ないよ。平気平気！それならめぐちゃんこそ大丈夫なの？」

「嘘は言わんでいい。あの日を境にピタリと呪いが消えたんだ。見てりやすぐにお前に呪いが移ったってわかるよ。小悪魔も言ってた

しな。お地藏さんなんかで俺をだませるとでも思ったのか？」

少しの沈黙があった。恵の目が源造を窺う。

「……消えた。大和撫子杯の前に俺は小悪魔にお願いしたんだ。もう、呪うなって……。それから消えてる。恵の記憶が戻ってから小悪魔、呼ぼうとしたんだけど全然、出てこねえんだ」

源造は観念したのか、恵に言った。

恵は源造に今朝の事を話すかどうか悩んでいた。

話すつもりだった。だけど、いざとなったら話せない。

だが、あの小悪魔は”源造の犠牲のもと”に言った。

命はとらないといったが、少なからず、恵が源造に迷惑をかける  
と言う事だ。

やっぱりいわなくちゃ……。

「なあ、今日、小悪魔が……現れたんだ」

「……!?!」

源造は驚いているようだった。それもその筈だ。

「魔本が、ヒョイと現れてさ、あれには参ったよ」

恵が言う。

「そしたらアイツ、源造が何かの犠牲になるって言い出したんだ。命はとらないって言ったけど……」

やっぱり言えない。恵は感じていた。

頭では言おう言おうと思うのだが、口が動いてくれない。

「……めぐちゃんのためなら俺は全然、構わないよ。それに命はとらないんだろ。大丈夫だよ」

いつもの笑顔で源造が言ってくれた。だが、その言葉は余計に恵を苦しめる。

こんな優しい源造に自分は、迷惑をかけようとしている。

今回の事件は明らかに恵自身が引き起こしたものだ。望まなければ小悪魔は出てこなかっただろう。そう、男になりたいなどと望まなければ……。男になれるかどうかは別として、小悪魔は、こういうことは実行に移す奴だ。もしかしたらまた、源造に呪いをかけると

言ってるのかもしれない。

「…だけど、これだけは聞きたい。何で小悪魔が現れたんだ？」  
真剣な目だった。恵は目を逸らす。

「俺に言えないことなのか？」

源造が言った。

今だ。今なら言える。恵はそう思った。

「実はな…」

恵が言おうと身体を乗り出した、その時だった。

「お待たせしました」

小林の声だった。

恵がはつと振り返ると、そこに小林が、美木が・安田がそして藤木が立っていた。

安田以外は皆、両手にコップを持っていた。美木が源造と恵の間に入ってきた為、恵は源造から離れる。言っ機会を逃してしまった。

「はい。これめぐちゃんの」

恵と源造の間を遮るように美木が座った。

美木は隣に座っている恵にコップを手渡した。

「それでこっちが源造君の」

「あつ、どうも」

礼を言っ源造は美木からコップを受け取る。

ビーと、上映開始のブザーが鳴り、あたりが暗くなかった。

最初はCMである。やはり休日の為か、どこも席は一杯だった。

映画のストーリーはこうだった。

アメリカの若い男性、トムが主役の物語だった。

トムはある大学の研究員だった。トムには恋人がいた。その恋人はリサという名で、トムと同じ大学の研究員だ。

そして、ある日、トムとリサが二人である実験をした。

だが、途中でリサが、決して混ぜてはいけないという薬を誤って混ぜてしまった。

大爆発が起こる。そして、あるうことが二人の身体が入れ替わってしまったのだ。

パニックを起こしたトムをリサが落ち着かせる。こういうとき、女性の方が強いのもかもしれない。と源造が思った。

いやまて、トムはリサの筈だから、今落ち着かせたのは、リサではなくトムなのか？もうわからなくなってしまった。

リサになってしまったトム、トムになってしまったリサはこれからどうするか相談する。

二人が出した結論は、皆には正体を隠しながら生活すると言うものだった。

『あなたがアタシなんて恥ずかしくて言えない！』

でかい男がその台詞を言うのだから面白い。

『僕もだよ。女になっちゃったなんて皆にはばれたら…』

という事だった。かくして二人の偽りの生活が始まった。

それから先のことを源造は覚えていない。

どうやら寝てしまったらしい。

気づいたら映画が終わってしまっていた。

「源造君、映画終わったわよ」

隣に座っている美木が源造に言った。

「もう？」

源造は思わぬ聞き返す。

「全く、お前は映画を最後まで静かに見ようという気にはならんのか？」

小林が注意する。

「寝るだけならまだしもだがな、五月蠅かったぞ」

恵が言った。

「めぐちゃん」と、美木が恵を叱る。どうせまた、今の台詞は女らしくない、

と言っているのだろう。「はっはい！」と、恵が条件反射で謝る。  
「へっ？」

源造が話の意味を理解できないでいると…

「いびきがちよつとね」

と、軒をかいていたことを美木が教えてくれた。

恐らく、五月蠅かったのだろう。源造は反論できなかった。

「とにかく出ましようか？」

恐縮している源造を見かねた小林が提案した。

「そうだね」

恵が同意した。上映が終了し、劇場は再び、明るくなっていた。

「源造、行くぞ」

恵が源造に言う。

恵の言葉で今まで、気まずそうにしていた源造の顔はパツと晴れ、幼稚園児も吃驚の子供っぽい笑顔で源造は恵の横に並んだ。

「全く」

といいつつ、恵が然程嫌がっていないのは源造に好意を抱いているからなのか？

美木はそんな二人の後を付けながら疑問に思っていた。

恵と源造を先頭に、小林と美木、そして安田と藤木が二列でゆつくりと劇場を後にした。

後ろの美木は小林と何かを話しているらしく、聞いている。

恵はそれを確認すると、正面を向いたまま、

「源造…」

恵が後ろを歩いている美木に聞こえないほど小さな声で言う。

「なあにめぐちゃん！？」と大きな声で言おうとしたが、止めた。  
上映開始前といい、今といい恵の様子がおかしい。

恵は小悪魔について何か言おうとしていた。もしかしたらもう一回、言おうとしているのかもしれない。

源造は恵の顔を伺った。

「ジロジロ見んな。美木が怪しむ」

言われて慌てて源造は正面を向きなおす。

「小悪魔のことか？」

源造が正面を向いたまま、小声で聞いた。

「そうだ」

恵がかすかな声で肯定した。

「アイツが、どうしたんだ？俺の犠牲ぐらいだったら構わないよ」

「…今は不味い。美木に聞かれた不味いんだ。」

家に帰ったら10分後に公園にいくから。お前も来い」

「でッデートー！？」

源造が大喜びで言う。小声だったのが幸いだ。

「バカヤロウ！小悪魔の話だ」

真剣な話をしているんだぞ、と恵が源造を睨む。

「ごめん」

「お前に関わるんだ。俺とお前に…」

恵が真剣な表情で言った。

「（俺に…？）」

源造は疑問に思ったが、何も言わなかった。

「めぐちゃんと源造君、意外と仲いいのね」

「うわっ！」

突然の美木の声に驚いた恵が声をあげた。

「なななな、何だよ美木、急に驚くじゃねえか！」

いつもの恵の口調になっているが、美木は何も言わなかった。

それよりも美木は源造と恵の仲に興味があつたのだ。

真剣な話をしていたなどと、微塵も思っていない。

「デートの約束でもしてたの？！」

「ば、ば、ば、バカ！誰がこいつなんかと！」

「真っ赤な顔で言われても説得力ないわよ」

美木が楽しそうに言う。

後ろで藤木が複雑な目で見ていた。

「（俺のようなフツウは、台詞も少ないんだ。シクシク）」

「フツ、まさかあんな映画を見るとは」

小悪魔が呟いた。小悪魔の前には小さな池がある。

池とっていいのかわからない小さな小さな水溜りのようなものだ。

そこに一本の釣竿がある。竿は池のなかの何かを釣るものなのか？

池の中には家に向かって歩く恵達が映っていた。

「これは丁度良い」

小悪魔は不気味に笑っていた。

『それじゃあ、また明日』

池の中の恵は皆と別れた。源造が、小林が安田が、藤木が、美木がそれぞれ別の方角へと分かれていく。池の映像はふたつに分かれ、右には恵が、左には源造が映っている。

恵は家の近くまで行くが、家には戻らなかった。玄関の前を素通りする。

約束どおり、公園に向かうらしい。

「フツ」

それを見て小悪魔が不気味に笑う。

その時、小悪魔はふと、あることに気づいた。池に美木が映っていたのだ。

美木が後ろを付けている。

「チッ」

小悪魔は舌打ちすると、立ち上がった。  
そして手を伸ばし、何かを唱える。

『恵を追うな。』

どうやらひたすら、そう唱えているようだ。

池に映っている美木の目から光が消えた。美木はその場にしゃがみこむ。

『何…？誰なの？』

美木の声が小悪魔の耳に届く。今、美木の頭に直接呼びかけているのだ。そう、”美木が恵は女の子だ”と気づいてしまい、再び魔法をかけたあの日と同じように…。

「美木ちゃん君はとんでもない事をしている。人の恋路を邪魔してはいけない」

美木の頭の中に小悪魔の声が聞こえる。

だが、美木にはその声が誰なのか理解できない。

それどころか、自分は誰なのかも考える事もままならない。

『あなた、誰？』

「私は人を幸せにする者だ」

『恵を追っちゃ駄目？』

「そうだ」

『絶対に？』

「そうだ。君は追うと後悔する」

そんなやり取りが何度続いただろうか？

美木はふらつきながら来た道に戻っていった。

どうやら小悪魔の暗示にかかったのだろう。

「フウ、美木も無駄な力を使わせてくれる。美木がいると魔法が上手く効かんからな…」

小悪魔は再びしゃがみ、釣竿を手に持つ。

「さてと、そろそろ朝にかけた魔法が効果を現すころ、かな？」  
池の中には公園が映っていた。

源造は家に少し寄ってからすぐに、公園に来た。

恵とデート、花ぐらい買ってきた方が良かったかな？

源造はそう思いながら、時計を確認する。

恵は10分後といった。まだ5分しかたっていない。

考えてみりゃ、前は時間通りにいけなかったんだな。

あの時は藤木を助けるのに手間取った。約束の時間に30分も遅れてしまった。

がっ、あそこで藤木を見捨てなかったのは正解だと今でも思っている。

だが、少々、時間をかけすぎてしまった。

今日はそんなへましねえ。源造が、そう思った時、恵が見えた。

「源造、待ったか？」

源造の前まで来ると、恵が聞いた。

「い、いやあ、全然。全然待ってない」

「そっ、それ？」

恵が源造の右手にある魔本を見て訊いた。

「ああ、一応持ってきた」

魔本を恵に見せ、言う。

「そうだな。悪いが、ここじゃ、話せん。人の少ないところ行くぞ。言っとくが、告白じゃないからな」

「わかってるよ」

源造は告白じゃないと訊き、ちよつとがっかりした様子で言った。源造とてそこまで馬鹿じゃない。事の重大さぐらいは理解しているつもりだ。

だから、魔本も持ってきた。魔本は押入れの中にちゃんと元通りしまつてあつた。

恵が嘘をついているとは絶対に思えないから、この魔本は天使邸で消えた後、また

元の場所に戻ってきたのだろう。恵が連れてきたのは、源造の家の近くの川原だった。

全ての始まりの川原である。ここで恵が魔本にお願いしなければ、全く違う人生を歩んでいただろう。あたりに誰もいないのを確認して、恵が

「実はな、源造。」

源造は黙って聞いていた。

「俺、小悪魔にお願いしちまつたんだ」

「！？まさか、寿命取られたんじゃ？」

「おいおい、心配する前に何願ったのか聞けよ。」

大丈夫、寿命は取られてない。それより……。すまん、源造！」

恵が源造に頭を思いつきり下げる。

「えっ、ちょ、ちよつとめぐちゃん？」

源造は慌てふためく、いきなり頭を下げられてどうしたらいいかわからないのだ。

「俺が全て悪いのだ」

恵が源造に頭を下げたまま言う。

「と、とにかく頭を上げてよ。めぐちゃんは悪くないから」

「いや、俺が悪い。だって俺は、魔本に……。また男にしてくれと頼んじまつたんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫くの沈黙。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

源造はなんて答えたらいいのかわからなかった。

恵はただただ、頭を下げるだけ……

「フツ、そんなことだろうと思ったぜ」

源造が落ち着いた表情で言った。

「何だよ！何で、そんな落ち着いてられるんだ。」

俺は源造を犠牲にして、男になろうとしてるんだぞ！！動機が不純なんだぞ！」

恵がヒステリックに叫ぶ。

「……今に始まった事じゃないだろ。俺は恵の為なら命を捨てる覚悟だ！俺はお前にどこまでもついていく！」

源造が言い切った。恵が頭をゆっくりとあげ、源造の顔を伺う。

彼はいつもの笑顔だった。

「フツ、蘇我源造。貴様も面白い事を言う」

「げ、源造……」

「それでこそ、いつものめぐだ。頭を下げるなんてめぐらしくねえぞお。」

「そうかもな……」

恵が小さい声で言った。

「しかし、あの小悪魔に恵を男にする力があるとは思えんのだが……」  
「何だと！？私はそのように見られていたのか？」

「源造、もつともなことというじゃねえか。実は俺もそう思うのだ」

「恵まで何を言っている……」

「ってことは？口からでまかせ」

「断じて嘘ではない」

「だけど、あの小悪魔、すっげー自信ありそうだったんだよ。まあ、俺も半信半疑だが……」

恵がぼそりと呟いた。

「でっ、小悪魔はいつ恵を男にするって言ったんだ？」

「もうすぐだ。そろそろだな」

と、魔本の中の小悪魔が思った。

「今日中って言うてた」

恵が源造に説明した。

「美木ちゃん、知ってるのか？」

心配げに源造が尋ねる。

「いや、言うてない。途中まで美木が俺を付けてたみたいけど、途中でいなくなった」

「時間だな。10、9、8」

恵と源造の様子を本の中で窺っていた小悪魔がカウントダウンを始めた。

「いなくなっただけ？変じゃねえか？あの美木ちゃんだぜ」

「6、5、4」

「そおだよな。いつもなら美木の奴、俺に撒かれるなんてへましねえんだけど……」

「2、1、時間だな」

小悪魔がそう、思った次の瞬間、

とてつもない閃光が、恵と源造を包み込んだ。

そう、小悪魔が呪文をかける時と同じ、閃光だ。

「源造！？こ、これ！」

「あいつだ。小悪魔のヤロ」だ！」

「わあああああ（時間だ。時間がきたんだ。）」

あまりの閃光に源造も恵も条件反射で目をつぶってしまう。

急に身体力が抜けていく。恵も源造も膝をついた。

「くそっ」

源造のその言葉を最後に、二人は意識をなくした。

それからどのくらい立っただろうか。

「・・・・」

恵は川原に倒れていた。

「どうなったのだ？」

起き上がるうとして、恵は違和感を感じた。

いつもの自分じゃない。声が違う。

これは女の声じゃない。男の声だ。だけど、どこかで聞き覚えがある。

「（男になれたのか？）」

恵は無意識のうちに喉を手で触った。喉仏がある。

やっぱり、男になれたんだ！

もう一度、声を出してみる。

「あー。あー。あー」

やっぱり男の声だ。恵は慌てて胸に手を当ててみる。胸は膨らんでいなかった。

右手も感覚が違う。ごつごつとした大きな手だ。今までの小さいひ弱な手じゃない。

恵が起き上がって、もつと身体を確かめようと、身体を起こそうとしたその時だった。

女の声だ。女の子の声が聞こえた。慌てて恵は声がしたほうを見た。

そこには信じられない光景があった。

## 2・これが事実なのだ

「ううう。め、めぐ？」

源造は仰向けに倒れたまま、真っ先にめぐの安否を確かめようと、声を出した。

まだ、完全に意識が戻ってない。身体はまだ起こせそうになった。「っ!？」

声を出してからはっとした。

いつもの俺の声じゃねえ。俺はこんな高い声じゃねえぞ。

口に手を運んで、違和感を感じた。手がいつもと違う。慌てて、その手を源造は目の辺りまで持つてくる。視界には青空が広がっていた。そんな青空を白い細い腕がさえぎった。

一瞬、源造は恵が自分の上に手を差し出したのかと思った。

だが、違う。

仰向けに倒れている自分の視界に入った手は、まさしく自分の手だ。

自分の思い通りに、自分の手であり自分の手でないその白く細い腕は動いた。

グー、パー、グー、パーと動かしてみる。

間違いない、俺の思い通りに動いてやがる。

その時、源造は違和感を感じた。胸がある。胸が自己主張をしている。

ど、どうなっちまったんだ。源造はパニック状態だった。

女のようになってしまった。いや、女のようにではない。まさしく女だ。

「はははは、俺どうしちゃったんだろ？」

すでに完全に意識は戻っていたが、あまりの出来事に源造は起き上がる力もなかった。

その時だった。近くで男の声がした。

「あああああ」

恵は驚いていた。相変わらず、男の声だった。自分の前に自分がいるではないか？

このロングヘアーの女は間違いない。天使恵、自分自身だ。鏡で何度も見たことある、その顔が、その身体が今、自分の目の横たわっている。

グーパーグーパーなどと腕を動かしているではないか！？

・・・なにやら胸を触って驚いているではないか！？

「ど、どうなっちまつてるんだヨ？一体！？」

がらがら声で恵が呟いた。男になる事は少しは予想していたが、こんな事になるなんて思いもしなかった。

天使恵の顔がこつちを向いた。天使恵の身体も驚いているみたいだった。

「おお！！俺が二人！？」

と、男になった恵を見て奇妙な声をあげている。

まさしく自分の、天使恵の声だ。

一体どうなっちまつたんだよあ・・・恵は混乱していた。

「（とりあえず、状況整理なのだ。）」

恵は自分自身に言い聞かせる。

「（俺は男になったのだ。声も身体も男だ。それで俺の目の前にも俺がいる。俺の身体だけど、俺じゃない。その身体は女のままなのだ。しかし、その俺の身体は変な事を口ずさんで、朦朧としているのだ。そして源造が・・・いない）」

その時、よからぬ思いが恵を襲った。ま、まさか・・・

あの映画が頭をよぎった。今日見たばかりのあの映画が・・・

もし、あの映画さえ見ていなければ、こんな発想は思いつかなかっただろう。

いや、そんな筈が・・・だが、それなら納得が・・・

恵は勇気を振り絞り

「源造？」と、自分自身の身体に尋ねてみた。

「……」

少しの沈黙が…。天使恵の身体が混乱しているらしい。

「……俺が声をかけてる。恵はどうしちゃったんだ？」

天使恵の身体が小声で返答した。相当、混乱している感じだった。さつきから手をグーパーグーパーと動かしては、無意識に身体を確認したりしていた。

これでわかった。自分の目の前にいる女は源造だ。

女の身体に驚いて、混乱しているという事なのか？

と、言う事は、俺が源造なのか？恵はふと思った。

「あ、ああ、あ、お、俺、蘇我、源造」

色々と発声してみる。確かにこの声、源造の声だ。

その声を聞いて、余計に混乱したのか、天使恵の身体をした源造はパニック状態だった。

無理もない。自分の身体が自分の名を呼んだりしているのである。

源造を無視して、恵は発声を続ける。

「俺が男の中の男になってやる！」

そうだ、この声だ。源造だ。

「めぐうちゃんんん！デートしよう」

我ながらナイス演技だと思う。これで、100%確定した。

この不気味な声、蘇我源造である。この身体も源造のものだろう。恵はよいつしよと、不慣れな源造の身体を動かした。

何とか普通に立つ事が出来た。

見おろすと口をパクパクと開けたり閉じたりしている女が横たわっている。

天使恵の身体である。だが、恐らくこいつの中身は源造だ。

恵は深呼吸する。

そして、天使恵の身体を見下ろしながら、

「おい、源造！起きろ！」

源造の身体をした恵が声をかける。

「……俺が二人？」

天使恵の身体（中身は源造と思われる）がボソツと呟いた。

「おい、源造！起きろ！」

誰だ。誰かが俺を呼ぶ。いや、これは俺だ。

俺の声だ。俺が、覗き込んでいる。俺の顔が見える。

「恵だ。天使恵だよ。それで前が源造だ。」

源造の身体が言った。

「……め、めぐちゃんなの？」

源造はほとんど無意識に問いかけた。まだ、頭が混乱していた。

処理能力の少ない頭だ。しょうがない。といったらやっぱり失礼

に値するだろう。

「源造、唐突だが聞いてくれ、俺の推理はこうだ。あの小悪魔は俺を男にするといった。だけど、俺の身体を男にするんじゃない、

源造と俺を入れ替えるって事だったんだ……。それなら力もあんまし使わなくてすむはずだ」

「……………」

天使恵の身体をした源造は何かを考えているようだった。

蘇我源造の身体をした恵も、彼、いやこの場合彼女になるのだからか？とにかく源造に考える時間を与える。

「……………」

「……………」

恵も源造もお互いの顔をじつと睨めっこしている。  
普通ならどちらかが笑ってしまいそうだが、今はそんな状況ではない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

恵はじつと天使恵の身体をした源造を伺っていた。

源造も同じように蘇我源造の身体をした恵を呆然と見ていた。

「・・・・・・・・・・俺が恵で、恵が俺!？」

暫くの沈黙の後、急に源造が上半身だけ起こした。

恵の身体をした源造が自分の身体をつま先から胸の辺りまで見ている。

「はは、俺、また、スカートはいてるよ。」

源造は無意識に言ってから思った。

確か、このチェックのスカートは恵が穿いていたものだ。

それにこの綺麗な白い足、恵のものに間違いなさそうである。

「・・・・・・・・俺が恵!?!??」

今度こそ、源造が大声を上げた。事の重大さに気づいたのだろう。

「\$%?%\$+%&%\$+&+\$!?!?!????」

天使恵の姿をした源造がわけのわからない声で叫んでいる。

そんな源造を見て、

「（源造、俺の身体で変な事すんな）」

とでもいつてやりたいが、”元凶は自分なのだ”と、自分自身に言い聞かせる。恵が望まなければこんな事にはならない筈だ。もしかしたら、今度こそ、源造に嫌われるかもしれない。と恵は思った。岳山での事件で、恵は一度、源造を見捨てている。見捨てたも同然だ。自分は美木をとった。そのせいで源造は棍棒で殴られたのだ。

そして、自分は源造に、何も言ってあげられなかった。  
足を拘束され、壁につながれていたせいだ。なんて事は言いわけにもならない。

恵は源造に何も言ってやれなかった。源造が爆弾を仕掛けられた時だってそうだ。

あの時、自分はそばにいてやるべきだったのだ。  
それなのに爆発の瞬間、自分はどこに行ってた！？

安全なところで爆発を見ていただけではないか？

源造は傷ついてたのだ。自分が盾になるべきだった。

その結果があれである。源造は爆発に耐え切れず、気絶してしま  
った。

それでも源造は恵を恨まなかった。だが、今度ばかりは状況が違  
う。

恵は男になれて喜べる。ずっと願ってきたのだから・・・。

だが、源造は女になってしまったのだ。

小悪魔に”自分は男で、女にされてしまった”と思わされたあの  
数日、自分はどんな辛い思いをしたのか…。恵は今でのあの時のこ  
とをしつかりと覚えている。

何をして『女の癖に』、何をして『女の子はもっと女の子らし  
く』といわれたのだ。

あの屈辱は忘れられない。いや、今回は自分の時と全く違う。

源造は16歳の男だ。16年間、正真正銘の男だった。

そして今頃になって、源造は女にされてしまった。天使恵という  
女に…。

今までの経験でわかる。天使恵のあの身体には力はない。源造の  
ような力は絶対ない。

恐らく、源造には耐えられないだろう。自分の時は9歳だから男  
も女もなかった。

女になったと思わされても、まだそれ程激しい、違いはなかった。  
そして何より、自分は女だった。

だが、源造は…。もともと男だ。

「…ごめんなさい…」

蘇我源造の姿をした恵が申し訳なさそうに謝った。

源造には本当に申し訳ない気持ちで一杯だった。

「め、めぐちゃん？」

天使恵の姿をした源造が驚いた表情で呟いた。

「源造、俺が小悪魔に変なこと頼んだから…。…やっぱり俺は男に  
なんかなっちゃいけなかったんだ。」

「…」

源造は黙っていた。

お、俺はなんて恵に言葉を返せばいいんだ？

源造は苦悩していた。そんな間にも恵の言葉は続く。

「源造、憎んでいいんだぞ？俺は自分の欲望のために、お前に迷惑  
をかけちまった。お前に嘘ついてたんだ。『女になる』なんて言っ  
て…。そんな気、これっぽちもなかったのに…。こんなの、全然男  
らしくねえよな…。」

蘇我源造の姿をした恵の言葉だったが、

源造にとってその声は蘇我源造の男の声でなく、天使恵の女の声  
のように聞こえた。

「…めぐちゃんを恨むなんて俺には出来ない。さっきも言ったけど  
俺はどこまでも恵についてくって決めてんだ…。女が何だ！？前  
にも言ったら、恵が男になるんだったら、俺が女になってやる！」

「…源造、ありがとう。でも、お前に迷惑はかけられん。元に戻る  
う…。」

真剣な表情だ。恵自身、かなりつらい選択だった。

「うん。…だけど…」

源造が言う。

「何も言っな。俺はお前の身体で男になっても嬉しくないのだ」

嘘だった。男になれて喜んでいない筈がない。

ましてや源造のような強い体を令、手に入れているのだ。恵は嬉しくてたまらなかった。

「めぐちゃん、だけど…」

「そりゃ俺だって、男になれて嬉しい。だけど、お前に迷惑はかけれんのだ。俺のプライドが許さん」

源造の言葉を見無視し、恵が言葉を呟いた。

源造は何か言おうとしている。

「…だけど…」

「五月蠅い！」

源造が何か、ぐちゃぐちゃと言おうとするので恵が怒鳴った。

「でも、めぐちゃん」

源造がめげずに言う。

「あああ！何だよ？一体、俺は男になれんていいと言っておるではないか…」

恵が叫んだ。

「そうじゃないよ。めぐちゃん、一体、どうやって元に戻るつもりなの？」

「……………」

源造のもつともな質問に恵が固まる。

た、確かにそうだ。どうやってたら元に戻る？

いや、こうなった原因は何だ？

そう、小悪魔だ。だが、小悪魔が元に戻すだろうか？

物は試した。と恵は思った。

「源造、とにかく起きろ」

恵は源造に手を差し伸べる。源造と目があつた。

上半身を起こした状態の源造は視線を少し上にし、じっと恵を見ている。

妙に可愛かった。

その時、ふと、恵は思った。

「（うつ、”可愛い”ではないか？つて、何を考えてるんだ俺は、相手は源造だぞ、相手は自分だぞ）」

”抱きしめたい”という感情を無理やり押し込める恵。

「（男つてのはこんなものなのか？！女を見ると、こう思っちまうものなのか！？）」

恵の頭は混乱していた。

「（いかんいかん。落ち着け。相手は俺だ。相手は源造だ）」

とにかく、無理やりこの変な想いを押し込めることには成功した。そんな恵の気持ちを知ってかしらるか、天使恵の姿をした源造が蘇我源造の姿をした恵の手を掴む。

恵はそのまま、源造を引っ張り起こした。こういうことをするのは男の身体は便利だ。

「め、めぐちゃん？」

いきなり手を勢いよく引っ張られたのだ。突然の事に、源造が驚く。

起き上がった源造はこれが自分の身体でないことを、再確認させられた。

何しろ、身長が違う。それに身体が軽い。天使恵のロングの髪の毛の感触がした。

「とにかく、小悪魔を…」

源造をまともに見ないように、恵が少し目を逸らしたまま、言った。

本当は『もう一度、呼ぼう』と言うつもりだったが、止めた。

呼ぶ必要がなかったのだ。小悪魔はもう、近くに落ちていた魔本の上に立っていた。

どうやら、あの閃光のとき、源造が魔本を手から離してしまったのだろう。

そしてあそこに落ちているのだらう。

「お二人とも気に入って頂けたようですね。私も嬉しい。」

あの時だ。恵が女にされた時（正しくは違うが…）と同じ口調の

台詞だ。

「やい、てめえ、こんな叶え方ねえだろ、元に戻せ！」

恵が怒る。

「あれえ。男になりたかったのでは？」

小悪魔が言った。

「なりたいと言ったが、こんな方法じゃなくてだな。俺だけ男にしる！それが無理なら、元に戻せっ！」

「おや、女に戻りたいのか？」

「…源造が迷惑してるだろ」

源造をチラツと伺い、恵が言った。源造はやせ我慢をしているのか、

そんなことない。そんなことないと、手を振っていた。

「お前は黙ってろ」

恵が源造を怒鳴りつける。

そして、小悪魔のほうを向いて

「さあ、元に戻してくれ」

と言った。

「本当に戻りたい？」

「ああ。本当だヨ」

恵が言った。

「…ごめん。実はどっちも叶えられないんだ。つまり二人はもう入れ替わる事は出来ないんだ。君たちの魂を入れ替えるのに相当な魔力を使ってしまった。恵と美木の記憶を変えた時以上に…」

小悪魔が嫌みたらしく言った。恵の魔法が時期に切れる。

と、言った時と同じ口調だ。

今朝の出来事もあの時、同様、嘘ではなかった。

小悪魔はちゃんと恵の望みを叶えた。こいつは本当に、嘘をつかない奴だ。

どっちも叶えられないというのもまた、嘘ではないだろう。

「わかった。寿命だろ？だったら俺からとれ」

源造からは取ると言わんばかりに言う。

「め、めぐちゃん?!」

源造が恵を止めようと、恵の前に出ようとするが、恵が伸ばした蘇我源造の大きな左手に邪魔された。

「無理だね。100年とっても君たちを元に戻す事は出来ない」「っ!?!」

恵は驚いた。そして、前の事を思い出し、身構える。

前はこの台詞の後に呪いをかけられたのだ。

「慌てる事はない。今回は呪いをかけるなんて真似はしない。」  
「どうやら、今回は大丈夫らしい。」

「・・・本当に元に戻せないのか?」

恵が真剣に聞く。

「今のところは無理だ。」

「……勝手なこといつてんじゃねえよ!俺はともかく、恵が困ってるじゃねえか。恵は俺の身体なんて嫌だって言ってるんだよ!」

天使恵の姿をした蘇我源造が恵の後ろで叫んだ。

恵は源造のその言葉に、再び気まづくなった。

「そっいえばさっき、俺、源造に『お前の身体で男になっても嬉しくないのだ』と言った気がする。」

「……源造…実は俺、さっき、また嘘言っちゃった。俺、実は嬉しかったんだ。こんな凄い力の身体が手に入って…。俺、6年間ずっと思ってたんだ。こんな身体が欲しいって…。」

恵が言った。

源造は驚いているのだろう。あるいは、恵のバカらしさにあきれているのか…。

「…だったらこれでいいじゃねえか…」

「げ、源造?!俺じゃなくてだな。お前の気持ちが重要なんじゃないか」

「めぐのためなら、女にでもなんでもなってる!」  
半分、自棄だった。

恵はそんな源造の気づいているから余計に源造を元に戻してあげたかった。

男が女になって、嬉しい筈がない。それがたとえ、愛する女性の為でも…。

恵はそう考えていたから、なんとしてでも元に戻りたかったのだ。

だが、そんな恵の願いは小悪魔に無視された。

「交渉成立だな」

二人の様子を伺っていた小悪魔はそういうと、消えてしまった。

「おい待て！」

恵が叫ぶ。そして、小悪魔が完全に消え、恵が冷静に戻ると、

「ば、バカヤロー！お前、自分が何言ったかわかってんのか！？」

恵が怒った。蘇我源造の姿だから迫力がある。

源造が一步後ろに引いた。

「…ごめんよ。めぐちゃん。でも俺、決めたんだ。めぐちゃんのためなら何してもいいって…」

そうだ。こいつはそういう奴だ。アマゾンに行こうと、女子高に行こうと、アルプスを越えようといってくる奴だ。現にこいつは大阪にまで来てしまった。

「…源造、辛いぞ。覚悟できてるのか？」

恵が真剣な口調で源造に尋ねた。

「…わからねえ。でも、努力してやる。恵だって出来たんだ。俺にも出来る」

源造の声も真剣だった。

恐らく、本気で言っているのだろう。

「あれは9歳の話だ。それに俺はもともと、女だったんだぞ？」

恵はゆっくりとした口調で源造に再確認した。

「でも男の子だって思ってたんだろ？同じじゃねえか。」

「しかしだな」

恵が呆れた感じで言った。

「…頑張るよ」

源造は小さな声で言った。

流石の源造もいつものような大声を出す、自身はなかった。なかつたが、その言葉に偽りはなさそうだった。

「…本当にいいんだな？」

最終確認だった。

「俺はめぐの為なら、頑張る！」

源造は今度はしっかりと宣言した。

「……」

暫くの沈黙があった。

恵は何か考えているようだ。

「わかった。もう、何も言わない。だが、問題が一杯ある」

「問題？」

と、源造が首をかしげる。

「そつだ。もう一度、整理するぞ。お前が天使恵で俺が蘇我源造だ。これは変更できん。いいな？」

源造が頷いた。それを確認し、恵が言葉を続ける。

「つまりだ。お前が家に帰って、天使恵として過ごさねばならん。

反対に俺は源造ん家に行つて、蘇我源造として過ごさねばならん。」

「つまり、俺が恵になりきらなきゃならねえってわけだ」

もう大分、源造は落ち着いていた。もしかしたら、今日見た、あの映画、結構役に立っているかもしれない。残念ながら源造は途中で眠ってしまった為、あの映画が最終的にどうなったのか知らないが…。

この落ちつた感じだと恵は最後まで映画を見ていたようだ。

「バレんなよ。ばれたら最後だからな！」

恵が言った。

『そつだ』と恵は自分の心の中で再確認した。

あの映画の中盤で、トムだったか、リサだったかが、『もう駄目

だ。皆にちゃんと話そう』と弱音を吐いたのだが、もう一人が『ばれたが最後、二人とも大学に連れて行かれ、

人体実験で解剖されてしまう』と言っていたのだ。

学者にとつて”入れ替わり”などというのは現実に起こるはずがなく、好奇心を抱いた学者に、モルモットにされると言うのである。美木がいたら『めぐちゃん、映画の見すぎよ』と言われたかもしれないが…生憎、ここに美木はいないし、源造は映画の中盤を見ていない上、ここまで力説する恵に逆らう事など出来ない。

「うん」

あまり理解できなかったが、源造は頷いた。

「…とにかくだ。お前、俺の家は…知ってるよな？」

当たり前だ。どれだけ行つた事だろうか？

「ああ。ばつちり」

「…頼子さんには気をつけろよ。何かと危ないから」

「頼子さんつて、めぐんちのメイド？危ないつてどこが？」

源造が目をはちばちさせて問いかける。

その様子が、また、可愛かった。

恵は再び、心臓をドキドキとさせるものの、何とか今度も抑えるのに成功した。

「（全く、何なんだよ。男つて奴はよお…）」

力があるのは嬉しいが、この気持ちを抑えるのは本当に辛い。

いつそのこと、このまま、押し倒してやろうか？と考えるが、

それは絶対に男の中の男とはいえない。

これでは最低の男になってしまう。それに相手は自分だと、何度も言い聞かせた。

「ああ、色々とな…」

恵は説明できなかった。

今の自分の気持ちを顔に出さないようにするのに必死だったのだ。はつきり言つて恵はすぐに顔に出してしまうタイプである。

「後はあのおっさんだな」

「あのおっさんってめぐちゃんの…?」

そう、父親のことだ。

「何かと、危険人物なのはお前もしつとるだろ?」

た、確かにと源造は思った。

恵の家に最初に訪問した時、源造はその事を知らされる羽目となった。

それに、性格の悪さも半端ではない。

あいつが、どこぞの王子が来たあのパーティーの時、源造にしたことといえば…。

「寝込みを襲うから気をつけろよ」

恵が忠告する。

「(ね、寝込みを襲うって?マジで?!)」と、源造が思った。

俺だつてした事ねえのに…という言葉が喉元まで出てきたが、流石に飲み込んだ。

と、同時にこりや、ぐつすり眠れねえと思う源造だった。

天使恵の身体に傷でもつけたら、

あるいはあのおっさんに恵の写真でもとられてしまったら、恵にあわす顔がない。

「頼子さんも結構危険だ。」

「寝込みを襲うとか?」

「そこまではせんが、やたらと奇妙な手を使ってくる。美木も気をつけるよ。頼子さんと美木のチームワークは最高だ。」

「…なんか俺、不安になってきた…」

「まあ、お前は完全な男だから、大丈夫だろ?」

今は女なのだから完全かどうかはわからないが、まあ、大丈夫だろう。

恵はそう思っていた。

「そうだよな。」

この気分転換の早さは源造らしい。恵がという言葉は何でも信じてしまうのだ。

「それより、俺はどうすればいいんだ？お前のこと、あんまり詳しく知らんぞ？」

「今日は、姉ちゃんいねえから、誰もいないし特に心配はないよ。俺は口数少ないから、

めぐちゃんも喋んなくても大丈夫だよ。ご飯は適当にすませて…。

俺の家、貧乏だから悪いけど…部屋は片付けてあるから」

「そうか。わかった。大丈夫だ」

「…それと今日はバイトあるけど、休んでも大丈夫だから、心配しないで」

嘘だ。今度休んだら首にすると言われていた。

あの岳山との事件とかで結構、休んでたのだ。相変わらず工事現場のバイトだった。

だけど、恵にそんな重労働させるわけにはいかない。

「そうなのか？俺、どんな仕事でも大丈夫だぞ」

「大丈夫大丈夫。全然大丈夫」

だが、源造も顔に出るタイプだ。

天使恵の顔からは冷や汗がたらだら。すぐにわかる。

「やっぱり、大丈夫じゃねえだろ？どこだ、どこのバイトだ？大丈夫、上手くやるよ。」

「…… 丁目の バイト。でも、止めといた方がいいよ。重労働だよ？しんどいよ。」

「俺を誰だと思ってるんだ？大丈夫だよ。この身体も試したいし…」

「で、でも…」

「大丈夫だって！でっ、何時からだ？」

恵が自信満々に言う。多分、恵なら大丈夫だろう。

そう思った源造は、

「8時から2時間だけ…。俺の顔は皆、知ってるみたいだし…その点は問題ないと思う。名前は森田って人だけしつとけば問題ないよ。現場責任者の名前だよ。現に俺もまだ2回しか言った事ないし…」

2回で5回も休んだのだから問題大有りである。

「そうか…わかった。そろそろ行くか？」

夕焼けで空は真っ赤に染まっていた。大分、時間がたってしまったらしい。

「うんっ！」

源造が元気一杯、うなずいた。

## 2・これが事実なのだ（後書き）

ついにやってしまいました。源造・恵入れ替えネタ！  
皆様の感想をお待ちしています！

### 3・源造を助けるのだ

河川敷から出て、二人は源造の家に向かうことにした。

源造の家はここからすぐ近い。

「いつもどおり、鍵はかけてない」

そういつて、源造が扉を開ける。

ここなら、大丈夫だと恵は思った。何度も来ているから大体の勝手はわかっている。

「待った、ここはめぐの家なんだから入って入って…狭いけど」

「お邪魔します」と言おうとした恵を源造が止めた。

恵もしまったと思い、口を手で押さえる。

不味い、これではこの先が思いやられるではないか。

これではいつボ口を出すかわかったものではない。

恵は不安だった。

「源造、俺も注意するから、ばれないようにしろよ」

恵は源造に忠告した。

「…わかってるよ」

天使恵の姿をした源造がいった。その口調、恵、そのものである。

「どうだ？上手くいってるか？」

そうそう、この口調も恵のものだ。

と、いうより二人とも男言葉（？）を基本的に使っているのだ。

恵の一人称は”私”でも”アタシ”ではない。少し、努力すれば真似できるだろう。

それに恵は今、女の子になる為に、口調を変えようと努力している最中だ。

多少のことなら、皆をごまかせるだろう。

「それじゃあ、俺は行くから」

源造が言った。恵がそんな源造を玄関から見送る。

天使恵の姿をした源造が玄関の扉を閉めると、家から元気よく出

て行った。

「・・・全く、とんでもない事になってしまった・・・」

後に残された恵がぼそつと呟いた。

恵の手の中には魔本がある。いつも源造が持っているからと、恵が預かる事にしたのだ。

天使恵の姿をした源造が持つていては、誰かが怪しむだろう。”

入れ替わった”とまでは流石に誰もわからないだろうが、恵が”小悪魔に男にしてもらおう”と思っていると誤解される事は間違いなしである。

恵は魔本を手に持ったまま、部屋へと向かった。

源造の部屋、今の自分の部屋へと…。

一方、こちらは天使恵の姿をした源造源造である。

「とんでもない事になっちまった」

源造は歩きながら呟いた。身体の動きは比較的良好いが、この身体、明らかにパワーが足りない。恵がいつも悔しそうにしていた理由が嫌というほどわかった。

「めぐちゃんも苦労したんだね」

と、源造は溜め息混じりに呟いた。

もし、ここで誰かに襲われたら？考えただけでもぞつとする。

自分は恵ほど、この身体を使いこなせそうにない。

源造がいつもしている体力任せの勝負では確実に負けるからだ…。

この身体で勝つ為には恵の様に”素早さ”を利用し、勝負するしかない。

だが、その心配は杞憂だった。源造と違って恵の敵は少ない。いるとしたら岳山達だろうが、流石に前回の件で懲りただろう。ほかに下心を持つ男達もいるが、所詮、恵が女だと思って油断している奴らだ。

一瞬で決着をつければ、体力まかせの源造の戦法でも勝てるだろ

う。

「恵さん！」

突然、背後から天使恵を呼ぶ声がした。

ドキッ！

源造は、自分の心臓がはつきりと音を出したのを聞いた。

嫌な予感がする。それに自分を呼び止めるあの声…よく聞く声だ。振り返ってみると、案の定、少し後ろで藤木が手を振っている。

「ふ、藤木！？」

源造が振り返って驚いている間に藤木が走ってきた。

藤木は源造の近くへ来ると、

「どうしたんですか恵さん？こんな時間に…（一人の恵さんに会えるなんて幸せ）」

「…」

そうか、今、めぐなんだ。と改めて再確認、源造は頭の中で返答方法を考える。

「（こんな時、めぐはいつも…）いや、ちょっとな。藤木は？」

「俺？スーパーに買い物に」

といって、右手に持っているスーパーの袋を見せる。

魚や白菜が入っているとところを見ると、今日の夜ご飯だろうか？

「恵さんは？」

「お、俺か？（めぐなら絶対こう問い返す）」

と、源造は聞いた。めぐの口調は大体わかっていづもりだ。

だてにいつも恵をつけまわしてはいない。

「またあ、俺なんて言っつて。美木さんに怒鳴られますよ（会話してる。恵さんとフツウに会話している。それも二人つきりで…）」

藤木は嬉し涙を流しそうになるのを堪えながら喋った。

まさに天国にいるかのような気分だ。

いや、本来の恵が聞いたらそれは普通どころか嫌味なのだが…幸い相手は源造だった。

「（いかにいかに、めぐちゃんの真似しすぎちゃった。）あつ、あ

「はあはあは」

とにかく笑ってごまかす。その間に源造は次の対処方法を考える。ボロは出せない。これも恵の為だ。

「あ、実は、ちょっと散歩にナ」

「さ、散歩、いいですね」

藤木も緊張して呂律が回っていない。

その為か、天使恵の姿をした源造も藤木と同じように必死な事に気づかないらしい。

「それより恵さん。源造に気をつけてくださいよ。源造の奴、恵さんが今、反論できないのを知って卑劣な手を使ってますから。」

何だと！？と、叫びそうになって源造は慌てて、自分を抑えた。

今、自分は蘇我源造ではなく天使恵なのだ。ここで殴っては駄目だ。

「（危ない危ない。もう少しでめぐとの約束破るところだったぜ）

あつ、でも、大丈夫だろ？」

と、そっけない返事だけを返す。

今回は何も考えずに地で答えたのだが、恵でも恐らく、こう返すだろう。

「いやいや、アイツは元悪王と呼ばれたあくどい男ですよ。今だつて何考えてるかわかりませんよ！」

藤木が力説する。殴ってやろうか？と思う源造だが、それは不味い。

とにかく、このままではボロが出ちまう。

そう思った源造はわざとらしく腕時計を見て

「あつ、もう行かなくちゃ」と、可愛らしく言ってみせ走り出す。

いまさら、記す必要はないが、恵はとても綺麗な。天使のような綺麗な身体を持ち主だ。

そんな身体を100点として、走る姿を70点とする。これで170点だ。

中身が”源造”という問題をマイナス50点として引いてもまだ

100点以上も点数が残る。それほど、天使恵は美しかった。

そんな天使恵が走っていくのを見て、藤木は追いかける事もなく……  
「あっはい。」とだけ声を返す。

幸せそうな顔だった。追いかけるなんてとんでもない。  
走り去っていく恵の後ろ姿が見れるだけで十分満足だ。

「（恵さん、今日は一段と綺麗です）」

と、藤木は感じた。

皮肉な事だがもしかしたら源造の方が、恵より綺麗に身体を動かしていた。

恵本人がそれを知ったら相当なショックを受けるだろう。

俗に体育座りと呼ばれる座り方で蘇我源造の身体をした恵は膝を抱え、畳の上に座っている。ここは源造の部屋……そして、今は自分の部屋のようだ。

何故こんなことになったのだろう。これが一時的かどうかすらわからない。もしかしたら、一生このままなのかもしれない。望んでいた筈だ。

自分はこのなる事を……。いや、嬉しい事は嬉しい。この力が自分のものになったのだ。だけど、素直に喜べない。自分は今、蘇我源造なのだ。望んでいた天使恵という男ではない。自分は蘇我源造で、源造が天使恵という女なのだ。望んでいたものとかなり違った。自分は天使恵という男になる予定だったのだ。こんな結果、望んでいなかった。

「ゲンゾー、上手くやってるカナ？」

恵が天井を見上げて呟いた。心配そうな顔だった。

「それにしても……男つてのは全く妙な生物だ」

恵が溜め息混じりに呟いた。

その妙な生物（＞恵曰く）に自分は今、なっているのである。

源造という男であるが、源造も長年の願いだった男だと言う事は間違いない。

「男の中の男か…」

こつやつてなってみると、男の中の男になったのかどうかはわからない。

今まで自分はずっと女だったのだ。そんな簡単になれるはずがない。

恐らく今はまだ、男の中の男からは程遠いだろう。

恵はふと机の上を見る。

机の上に置いてあるアナログ式のオーソドックスな目覚まし時計は5時を差していた。

「8時か」

と、恵は呟く。

8時にバイトだ。

それまでどうしようかな？

恵はそう考え、無意識に足元に落ちている魔本に目を向けた。

「！！？」

魔本を見て、恵は声も出せないくらい驚いていた。

小悪魔が魔本の上で胡坐をかいて座っているではないか！？

「よお」

小悪魔が声をかけてくる。

恵が一步、後ろに引く。

「・・・お、お、お前、なんで？」

「あれえ〜？意外？いつもこつやつてるけど、源造言ってなかった？」

小悪魔が言った。恵は首を横に振る。

そんな事、聞いてないヨ。

「まあ、気にしなくてもいい。私は何もせん」

と、明るい口調で言われても、相手は小悪魔だ。

源造を女にしてしまった奴だ。自然と気にかかってしまう。

「・・・本当にいつもこうやってるのか？」

「そうだよ。源造の話し相手になってあげてるんだヨ（寿命も取れるし）」

小悪魔が言った。こうやって小悪魔が話すと、別人のように思える。

「そうそう、一つ忠告しとく・・・」

と、小悪魔が言った。

「何だヨ？」

恵がジト目で小悪魔を見る。

「源造の呪い消したわけじゃないから。」

小悪魔が平然と言った。

「あつ、今、恵になつてる源造の方・・・」

小悪魔が補足する。この言葉は恵に衝動を与えた。

女にしてしまっただけでも罪悪感を感じているのだ。

その上、呪いときには恵は黙っていられなかった。

「な、なんだとお！」

恵が拳を握り締めて小悪魔を睨みつける。

「あれえ、喜ぶべきじゃないの？源造は今、非力。ピンチに陥った源造を男の恵が助ける。そうすれば源造に格好いいとこ見せられるんだヨ」

小悪魔が感謝される覚えはあっても恨まれる覚えはないと言わんばかりに言った。

「ふざけるな！」

「ふざけてないさ。それより源造を助けなくていいの力ナ？」

小悪魔が意地悪そうに言った。

次の瞬間、恵は小悪魔をその場に残し走り出していた。

天使恵の姿をした蘇我源造は走っていた。

家まであと少しという時だった。

「ハッ!？」

源造は自分の真上でその気配を感じた。

源造ははっと飛び跳ね、横に逃げる。今まで立っていた場所には大きな、鉄骨が落ちていた。直撃していたら即死だったろう。小林の家での特訓、大分、効果が上がっているらしい。大きな大きな鉄骨だった。

「（不味いな。呪いがまだ消えてねえ）」

ずっと呪いなんてなかったが、今また復活した。

もしかしたら、前契約した契約の期限切れなのかもしれない。

「小悪魔のヤロー」

源造は複雑な気分だった。

もし小悪魔が源造という魂に対し呪いをかけたのでないとなれば再び、

蘇我源造の身体をした恵が被害にあうということになってしまう。その点は良かった。

だが、この身体に傷をつけたらどう詫びる？どちらにしろ、恵も被害を被るのだ。

源造は複雑な気分だった。

「だ、大丈夫ですかあ!」

上の方で声が聞こえた。

源造が見ると、5階建てのビルの上に誰がいる。鉄骨が落ちてきたビルである。

上にいるのはヘルメットを被っている若い男だ。恐らく、工事現場の作業員だろう。

「すみません!急に落ちてしまつて!大丈夫ですか!すぐに降りますから!」

工事現場の人が上で叫んだ。蒼白な顔をしている所を見ると、こ

の人の責任になってしまふのだろうか？

「いえっ！大丈夫ですからもういいですっ！！」

と、源造が大声で返す。

恐らく、あの作業員に責任はない。

悪いのは小悪魔であり、呪いをかけられている自分だ。

源造はそう叫ぶとすぐに、走り出した。

ここにいてはあの作業員に迷惑をかけるだけである。

まだ若い男だ。工事現場を首になるかもしれない。

工事現場にバイトをしている自分としてもこの男に迷惑はかけたくない。

源造は一目散に走り出した。家まであと少しだ。

走る。走る。

もうすぐだ。

この角を曲がると…。

…見えた。

この大きな豪邸。天使恵の家だ。

ようやく、天使恵の姿をした源造はついに天使邸に到着した。

玄関の前で、源造は立ち止まった。

急な運動の為か、前かがみになり、膝に手を置き、少し深呼吸する。

そして、源造はインターホンを押しそうになって止める。

ここは自分の家だと言い聞かせる。

源造は再び、門を見た。

ちよつと待て…。

この家ではインターホンを押さなければ家に入れないではないか…。

そびえたつ門を見ながら源造は思った。

結局、源造は天使恵の細く綺麗な右手で、インターホンを押した。

『お帰りのさいませ恵様』

声がした。

「ただいま」

とだけ声を出してみる。

扉がゆっくりと開いた。

源造はぐくりと唾を飲み込むと、ゆっくりと天使邸に入っていた。

『（源造、ばれるなよ）』

自分自身に言い聞かせる。ばれるわけにはいかない。

玄関に入って、まず一番にみた人物、それは頼子さんだった。

「（めぐが頼子さんには気をつけろって言ってたけど、どういう意味なんだ？）」

検討もつかない。こんな優しそうな顔をした人が何かするとも思えない。

「お帰りなさいませ。恵様」

こういうとき、恵はどう返事するんだ？と考えていると

「恵様、女の子はこういう時、『愛する頼子さん、ただいま』というのです」

頼子が言った。ナイスタイミングだ。

あやうく源造はその台詞を言いそうになってしまい、慌てて口を押さえる。

そして、

「ふ、ふざけんな。何が愛する頼子さんだ」

源造が叫んだ。源造の口調だが、恵のものとさほど変わりがなく・・・意味がわかった。

恵が言っていた意味がわかってしまった。

どうして頼子さんに注意しなければならなかったのか…。

源造はこの人の意外な一面を見た気分だった。

「駄目ですよ。恵様、女の子は女の子らしく」

かなり厳しい口調で頼子さんが言った。

当然であるが源造だと言つことには気づいていないらしい。駄目だ。

悪王と呼ばれた源造でもこの女には勝てない。

源造は戦意喪失し、玄関から廊下へとあがった。

恵の部屋は何度も行った事がある。その点は安心だった。

「（めぐっていつもこんな事、言われてるのか？）」

源造は歩きながら考える。何だが、恵の気持ち（苦労）がまたも少しわかった気がする。

後ろをチラッと伺うが、もう頼子さんはもういなかった。

源造はドアを開ける。そう、この大きな部屋、恵の部屋だ。

「（ここだけでも、俺んちと同じぐらいの広さじゃねえか）」と以前は思ったが、

もう、ここに来た回数も数え切れない。特別、違和感は感じなかった。

「ハア……」

源造はソファ―に座ると溜め息をつく。堂々としていられるのは源造の性格だろう。

やっと一人になれた。

源造はまだ、完全に整理できていない自分の頭をもう一度、整理しようとする。

「（まず、めぐが俺になつて俺がめぐになつちまたんだよな）」  
信じられない。やっぱり信じられない。そんなことが現実にあつていいのだろうか？

だが、今の自分を見ても信じるしかない。胸が自己主張している。自分はスカートを履いている。さらに、身体は柔らかく、身体は男ではない。

鏡の前で自分の身体を見る。そこには天使恵が立っていた。

どこからどうみても天使恵の身体だった。

「ハア……」

源造はもう一度溜め息をつく。

よく見ると前にいる恵も溜め息をついているではないか？  
鏡なのだから当然だ。

「（めぐは溜め息なんかついちゃ駄目だ。可愛くないヨ）」

と、源造は前が鏡という事も忘れ、心の中で呟いてしまう。

「（待て待て、前は鏡じゃねえか…。可愛いナ）」

だが、不思議なことに源造は鏡に抱きつきたくまではならなかった。

普段なら相手が鏡だろうと間違いなく、抱きついてしまっていただろう。

鏡に映る恵、それだけでも十分だった筈だ。

だが…抱きつけない。抱きつこうという気が起こらない。

何もかも望みどおりになってしまっからかもしれない。

鏡の中の恵は思いどおり動く、笑ってみせれば笑う。

自分が怒ってみせれば怒る。

「（めぐちゃんは前にいるのに…。）」

駄目だ。どう頑張っても前にいるめぐを好きになれない。

”綺麗だな”と思う。

だが、それ以上はどう頑張っても思えない。

いや、相手は鏡に映った自分なのだ。自分自身が天使恵なのだ。

この感情が普通なのだろう。

感情はある程度は容器（身体）で変わってしまうものなのだろう。

源造は理由もわからないまま、深い溜め息をついた。

その時、LLLLL LLLLLLとベルが鳴る。電話の呼び出し

音だ。

源造は恐る恐る受話器を取った。

「恵様、お電話です」

電話の向こうで頼子さんが言う。

電話？誰からだろう。

「美木様からです」

美木ちゃんか…。ややこしい気がする…。。

源造は不安になりながらも、

「わかった」と一言、言った。

「つなぎます」

軽くプツと電話を切り替える音が聞こえる。

『もしもし。恵?』

美木の声だ。

「み、美木ちゃん? な、何かしら?」

『: 別にそこまで女の子らしく必要ないわよ。いつものように美木で良いわよ。』

でも意外だなあ。電話したそうそう恵が女の子らしいんだもの『

美木は電話の向こうで軽く笑いながら言った。どこか嬉しそうだ。

源造はしまったと思う。そうだ。

恵は美木のことを呼び捨てにしているのだ。

「い、いやちよつと。でっ、なに、カナ?」

源造はぎこちない喋り方で言った。

「いや、これからちよつと出てこられる?」

「これから?」

源造が聞き返す。

「うん、ちよつと恵に伝えたい事があるから」

「伝えたい事?」

「悪いけど私の家まで来てくれない? 向かいにいかせるから」

「・・・わかったヨ」

こうなつては断るわけにはいかない。

源造は少し戸惑いながらも答えていた。

「じゃあ、表に出ておいてね。」

美木はそう言つてすぐに「切るよ」と言つて電話を切つたようで、プープープーと通話が途切れたことをあらわす電子音が聞こえていた。

ハアハアハア

慣れない身体で全速力で走っている為か、呼吸がかなり乱れている。それでも速度を落とす事無く、恵は走っていた。自分の家・天使邸まで後、少しだ。

もつとも今は自分の家かどうかはわからない。上手く喋らないと、門前払いをくらってしまうだろう。自分の父親の性格ぐらい把握している。

恵は走りながら今後のプランを考えていた。

その時、一台の黒い車が自分を追い抜いていった。

見覚えがあった。

「あれは、美木の家的車!？」

何でこんな所を!？と考えるが答えはすぐに出る。

なに簡単な事だ。この近くである車が行く場所というのなら天使恵の家しかない。

そう、源造が何かのトラブルに巻き込まれて、美木の家に行くということしか…。

美木が何で自分を呼ぶかわからない。だけど、あれは源造を迎えに行くものだ。

と、恵は確信していた。

「くそッ。先回りダ」

恵は方向を変え、美木の家へ向かう。

「(無事でいろよ。ゲンゾー!)」

恵は走った。ひたすら走った。

美木の家までならこのペースで走れば10分もあればつく。

「(ペースを落とすな。走れ!)」

今にも心臓が飛び出しそうなくらいの負担がかかっている。呼吸もかなり乱れてきた。

「(くつ。いくらゲンゾーの身体とはいえもたん)」

だが、恵はペースを少し落としただけでそれ以上落とそうとはしなかった。

「(こうしている間にも源造に何かあるかもしれん)」

恵は身体に鞭をうち、走り続けた。

頼子さんに、美木の家に行きたいとだけ、ぶっきらぼうに告げた。明るい笑顔で頼子さんは玄関まで連れていってくれた。普段の恵とどこか様子が違うと薄々、感ずいてはいるようだが、中身がパイナ君（＜源造のこと）だとは夢にも思ってもいないだろう。

玄関の外には黒いボディーの車が一台止まっていた。

源造も何回か見たことがある。美木の家の車だ。

源造が近づくと運転手がドアを丁寧に開けた。

「どうぞ」と、手招きをしている。

入学したてのころなら戸惑ってしまったかもしれないが、あの二人と付き合ってもう大分たっている。恵の家の車にだって美木の家の車にだって乗ったことがある。

それにこの運転手だって初対面じゃない。こういうのにも慣れていた。

源造は無言のまま乗り込んだ。いつもの恵はどうやって乗っていたのだろうか？

脳裏にそんな事が浮かんだが、運転手が無表情のまま運転席に戻ったという事を考えると、特別、失敗はしなかったらしい。

「（と、とにかく車に乗ったけどよお。俺、これからどうすればいいんだ）」

なんとか美木の家の車には無事、乗れた。

が、一番の問題は美木だ。隠し通せるとは思えない。

「（男は諦めてはいかんだ）」

自分自身に言い聞かせた。とはいえ、自信は全くない。

演技力は下手だ。それは自覚しているつもりだ。

それに美木と恵が普段、どんな会話をしているのかも検討がつか

ない。

これでは戦時中、言葉も通じない敵の陣地の真ん中に一人でのりこむようなものだ。

「（美木ちゃんにだけは話すか？）」

源造は考えた。

その時、恵の『ばれるなよ』という声が頭の中で響いた。

源造はブルブルと頭を左右に振る。

「（何考えてんだ、俺。めぐと約束したじゃねえか。）」

源造は自分に言い聞かせた。

そんなことを考えている間にも車はまた一つ交差点を通過し、美木の家へと近づいている。

「（そういえば、美木ちゃんの大事な用って何だ？）」

思いつかない。

普段、恵と美木はこんなふうにも何度もあっているのだろうか？  
それとも今日が特別なのだろうか？

わからない。

そんなことを考えているうちに車は門の前に止まった。

恵の家とはまた違う、純和風の豪邸だ。規模も恵の家の数倍はありそうだ。

「（ついちゃった）」

源造が呆然と座っていると、運転手がドアを開けてくれた。

新鮮な外気が流れ込み、源造は急に現実引き戻される。

「恵様、どうぞ」

源造はゆっくりと立ち上がった。

そして屋敷を見て、ゴクリ。と、唾を飲み込む。

「（もう逃げられねえ。めぐの為に俺は行く！！）」

決心した。

一歩、一歩と足を進める。敵の城に乗り込むかのような足取りだ。  
「よくぞ。おいでくださいました、恵様」

聞きなれた声…坂月さんだった。

源造は顔をあげ、彼を見る。そして、

「美木ちゃ、…いや美木が用って何か？」

「詳しくは私も存じていません。美木様より直接お伺い下さい」

坂月さんは丁寧な口調で言った。

彼も、当然の事ながら天使恵が源造だと気づいていないようだ。

「美木様…。恵様をお連れしました」

坂月は襖を開けると、言った。

部屋の中に美木がいるのだろう。

「恵、入って…」

源造の予感は的中した。

部屋の中から聞こえたのは美木の声だった。

源造はゆつくりと部屋に入った。

襖が閉められた。

前に美木が座っていた。美木は今日、会った時と全く同じ格好をしていた。着替えてないのだろう。美木はじっと源造を見ている。

「あ、あのお。な、何かな？」

源造が聞いた。

「あつ、ごめんね。こんな時間に呼んで」

外はすでに暗くなり始めている。

「いや、別に…」

源造は言った。

「実はね。あの小悪魔のことだけど（恵、何かへん？）」

美木は違和感を感じながら言った。

「…小悪魔がどうかしたのか？」

源造は聞き返した。特別、恵の真似をしたわけではないが、幸いにも恵が喋っているのとあまり変わりはない。

「今日ね。あの後、私、恵をこっそり追いかけようとしたの…。このことについては謝る。私が勝手にとった行動だから…。でも、その途中、急に意識がなくなっただの。」

「意識がなくなった？大丈夫かよ？（めぐちゃんを追いかけてようとした？）」

心配そうに源造が聞いた。その雰囲気がまさしく恵と同じ感じだ。身体がある程度、同じ雰囲気に見せているのだろうか？

「うん。大丈夫。でも…（やっぱりいつもの恵力ナ？）」

「でも…？」

「頭の中で誰かが必死に恵を追うなっていった。誰だかわからない。わからないけど、なんとなくあの時に似てた。大和撫子杯のあのときに…。もし前が小悪魔の仕業って言うのなら、今回も…。」

美木は恵の顔を伺いながら話した。

「（美木ちゃんはめぐを追いかけてようとした。だけど、途中で意識を失っちゃった。それは小悪魔のせいだった。・・・待てよ。理由がわかつちまうじゃねえか…。何で小悪魔が美木ちゃんをめぐや俺と合流させなかったか…）」

そうだ。理由はタダ一つ。

小悪魔は恵と源造を入れ替わらすのに邪魔な人間を呼びたくなかったのだ。

それしかない。

あまりに簡単にわかってしまった原因をどう美木に説明するか源造は戸惑う。

説明する「正体を白状するなのだ。自然と、美木から視線を逸らす。」

「そ、そんなこと…」

流石にないとは言えない。

「（どうする？ばらしちまうか？だけど、めぐちゃんが…）」  
自分の中で問いかける。

「恵はどう思うの？小悪魔のせいだって思うわよね」

美木は同意を求めるかのようにいった。

「……」

源造は戸惑っていた。どう答えてよいのかわからない。

「恵？」

不審に思った美木が尋ねる。」

美木は恵のテンションが低いことに疑問を感じていた。

「（やっぱりいつもの恵じゃない）」

「（ま、不味い。どう答えりゃいいんだ？）」

返答に戸惑う。源造の小さな脳みそ（>失礼だなっ！）では致し方あるまい。

なんて答えればいいのか全く分からなかった。

「どうしたのよ？恵らしくないわよ」

美木がもつともな事を言った。

確かに中身は源造。恵らしくないのは当然の事だ。

「そ、そんな事ないよ。美木ちゃん」

言ってしまつてから慌てて口を押さえるが、時すでに遅しである。

「み・き・ちゃん？恵？」

美木は首をかしげている。

「どうしたのよ？いつもの恵らしくないわよ。喋り方に戸惑ってるのはわかるけど、今は普通でいいのよ」

「…い、いや、そういうわけじゃあ（ま、不味い。ば、ばれちまうよ）」

源造が戸惑いつつも答える。

「美木ちゃんなんて、それにその喋り方まるでゲンゾー君みたいね」  
美木が冗談のつもりで軽い口調で言った。

だが、美木は見た。見てしまった。

その言葉を聞いた自分の前に座っている天使恵が顔色を真っ青にしたのを……。

「め、恵？（…やっぱりいつもの恵じゃない…）」

「…あ、あの、あのさあ…（な、情けねえぞ。これぐらいでパニックるなんて…）」

源造は何かを言い返そうとするものの、声が震えてまともに喋れない。

パニックを起こさないようにと自分自身に言い聞かせるも、いい案が浮ばない。

相手は仮にも美木なのだ。そう簡単には誤魔化せそうにない。その時だった。襖が開いた。

「お取り込み中、申し訳ございません。ですが急を要しますので……」坂月さんだ。急を要すとは言っているもいつものように落ち着いた口調だ。

「あの方がお見えます。お通しますか？」

「あの方？」

美木と天使恵の姿をした源造が、同時に聞き返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0799a/>

---

ゲンゾウにナレマシタ

2010年10月10日13時45分発行